

誰かのために

弘前市立第二中学校

竹森菜奈

対象作品／辻村深月著『かがみの孤城』ポプラ社

「かがみの孤城」。気になつてページをめくつていた手が止まりました。それは、学校に行けなくなつてという文を見たからです。私は学校が楽しいです。学校に行かないことなんか想像もできませんでした。

ここでも初めは普通に学校へ通っていました。しかし、他人の恋愛に巻きこまれ、そこからクラス内での嫌がらせが始まりました。家に来られ、ドアをドン！ドン！ドン！とたたかれた時は、とても怖かつたと思います。

ここまでのことではなくても、嫌がらせをしたり、人の悪口を言う人は、私の周りにもいます。人の事を言う他に話すことがないの？と聞きたくなります。

ここからは、このせいで学校に行けなくなつてしましました。でも、ある日、部屋の鏡が光つて、鏡の中に城が表れたのです。城には、ここと同じ、中学生くらいの子たちが、こころを入れて7人いました。驚いたこころ達の前にやつてきたのは狼の面を被つた少女でした。これから、こころ達はこの

城で共に過ごしていきます。
私の身近な人も、ある事がきっかけで学校に来ることが出来なくなりました。とても明るくて、部活も一生懸命だつたので、悲しかったです。直接その子が、悪口や嫌がらせをされた訳ではありませんが、友達がからかわれたり、悪口を言われているのを聞くのがつらくて、来られなくなつてしましました。

きっと多くの人は、自分がされている訳ではないのになぜ？と思うでしょう。

でも、私は分かります。私もそういうのを聞くと悲しい気持ちになるからです。

だから、この本を読んでいて、登場人物は私と同じ中学生、私の身の周りにも同じような事が起こっていることもあります。この本にはとても共感しました。そしてこの先、こころ達を始めとした主人公達はどうなるのだろうと心配しながら読みました。

ただ、この城には願いが一つだけ叶う鍵がありました。でも、誰かが願いを叶えてしまうと、その時点では城は閉じ、城での記憶もなくなってしまうことを狼少女に告げられました。私がこころの立場だったら鍵を見つけたとしても、隠しておくると思います。城で、せつかく仲良くなつた友達との記憶がなくなるのは、やっぱりさみしい気がするからです。実際にこころ達も鍵を見つけた後、どうするか悩んでいました。そして、見つけたとしても、本当に最後城が閉じる時まで使わない決めました。私も、こころ達の意見に賛成でした。

けれど、アキが城の閉まる五時を過ぎても帰らなかつたせ

いで、連帯責任として狼に食べられるというペナルティーが課せられました。でも、その日城に来ていなかつた人だけはペナルティーの対象外です。その日、こころだけは城に来ていませんでした。こころは皆を助けるため、アキのルール違反をなかつたことにするため城へ行き、鍵を見つけることを決心しました。

荒れ果てて、暗くなつた城へ足をふみ入れるのは、とても不安だつたはずです。こころの勇気には感動しました。こころが鍵を探している間、皆のたくさんの記憶に触れました。親などからのプレッシャー、嘘についてしまう自分、

お姉ちゃんの死。悲しい、つらい記憶もたくさんありました。私も読んでいて、心がしめつけられるようでした。

やがて、こころは自分を含めた7人が、それぞれ違う年代での雪科第五中学校の生徒であることに気づきました。そして、鍵を見つけたこころは、「アキのルール違反をなかつたことにしてください」と願いを口にしました。

願いが叶つたら記憶はなくなつてしまふし、皆もそのことを望んでいたんだと思います。もちろんこころも。でも、アキや皆を助けたいというこころの、仲間を大切に思う気持ちがとても伝わってきました。

この本を読んで、一番心に残つた言葉は、最後にこころがアキへ向けて言った「未来で待つてゐるから」「2006年。アキの十四年後の未来で私は待つてゐる。会いに来てね」です。時代は違つても、未来で会える。助け合える。だから、生きていってね。という、こころの気持ちが伝わってきました。こころ達はこういうふうにつながつていくのだと思います。私は、こころ達は必ず未来で会えると信じています。

私の世界では、「かがみの孤城」は存在しません。けれど私が、私の大切な友達にとつての「かがみの孤城」に少しでもなつてあげられたら良いなと思います。